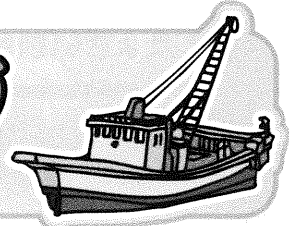




何でも魚^{うお}ツチング

No.85 『アツモリウオと鶴岡の歴史』



このところの日本海では、ダイオウイカやリュウグウノツカイといった、ちよつと風変わりな生き物たちが頻繁に登場し、ニュースでも度々取り上げられているのを皆さんもご覧になったことと思います。

ここ庄内沿岸でも、ユウレイイカ(何でも魚ツチングNo.83で紹介)やリュウグウノヒメ(リュウグウノツカイと名前は似ていますが、姿かたちはまったく異なり、エチオピアと呼ばれるいるシマガツオの仲間です)など、あまり見かけない魚たちが漁の網にかかっています。こういった魚たちを漁師さんや漁協の職員さんが紹介してくださるため、私も水産試験場の職員たちも図鑑で見られない珍しい魚たちを間近に観察することができ、とても勉強になっています。

今回はその中から、アツモリウオという魚にスポットを当ててみようと思います。

写真の魚は、今年の春、鼠ヶ関沖の底びき網に入ったアツモリウオです。スズキ目トクビレ科に属し、日本海での生息数は少なく、体長は10cm程度の小さな魚です。象の鼻のように見える太く長い一本のひげと、赤い甲冑を着たような姿が何ととっても特徴です。

その名前と見た目の特徴から、歴史好きの方はピンと来たかもしれません。実はこの魚、平敦盛(たいらのあつもり)を由来に命名された魚なのだそうです。

さて、平氏とくれば源氏。同じトクビレ科には源氏方の熊谷直実(くまがいなおさね)を由来とするクマガイウオという魚も存在し、体型はアツモリウオにそっくりですが、体色は褐色を基調とした地味なものです。この近縁な2種の魚は、その体色の違いから、平氏の赤旗と源氏の白旗になぞらえて対となる名前が付けられたようです。

ちなみにこの魚たちはハルヤマ(標準和名・シロウ)と呼ばれる魚の仲間です。私の経験上の話ですが、ハルヤマは結構美味しかったので、アツモリウオももしかしたら美味しいかもしれません(保証はありません)。ただし、減多に獲れない上に小型で身も少ないため、食用には適しません。

余談ですが、同じように平氏と源氏になぞらえて命名された生物は他にもあり、ヘイケボタルとゲンジボタル、園芸用として人気の高いランの仲間のアツモリソウとクマガイソウなどがあげられます。

生き物好きが高じて水産試験場に勤務する私にとって、歴史はちよと苦手

な分野です。しかし、この原稿を書くにあたってにわか勉強を試してみたところ、歴史を身近に感じることでできる面白い発見につながりました。

追手から逃れ日本海を船で北上した源義経は、鼠ヶ関で上陸すると羽州浜街道をさらに北上して奥州平泉を目指したとのこと。今回、アツモリウオのサンプルが鼠ヶ関沖で獲られたことには何か縁深いものが感じられました。私の住む鶴岡の歴史に触れる良い機会となりました。

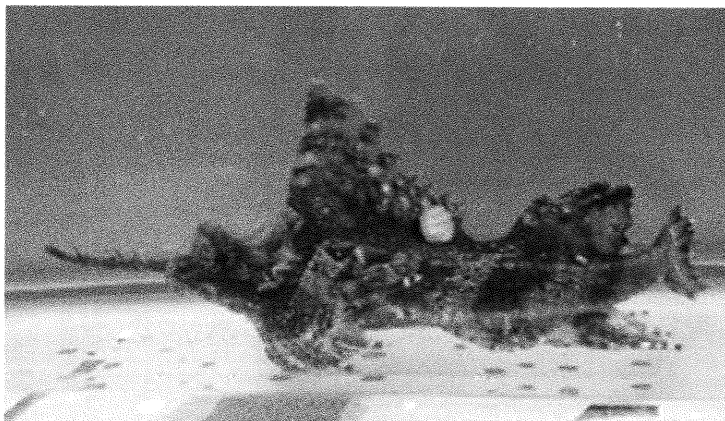


写真 鼠ヶ関沖で漁獲されたアツモリウオ

水産試験場 海洋資源部 研究員 野口 大悟